

【議事概要】令和7年度第2回札幌市せき柱側わん症検診検討会

名 称：令和7年度第2回札幌市せき柱側わん症検診検討会

日 時：2025年8月19日（火）午後6時30分開会

会 場：STV北2条ビル 3階 会議室C

出席者：全委員11名のうち、10名が出席（1名欠席、1名遅参）

その他：会議は非公開で進行され、会議資料および議事録等も非公開として取り扱う。

1 議題

(1) 国のせき柱側わん症検診機器体験会の状況

8月7日に札幌市と北海道が参加した国の体験会について説明。

体験会ではスコリオデバイスとスコリオマップの2機種を使用。

国が理解促進事業を進める背景として、現状の検診における精度、関係者の負担、結果の記録といった課題が挙げられ、機器がその解決に期待されていることが説明された。

(2) 第1回検討会の振り返り

第1回で議論された二つの論点、「札幌市におけるせき側わん症検査の評価と今後の方向性」と「機器検査の必要性」に係る委員の意見を再確認。

・評価と今後の方向性：

前屈検査導入で発見率向上、プライバシーと心情配慮の必要性、着衣検査が子どもに安心感を与える、成長期に悪化するため毎年検査が好ましい、前屈検査のみでは専門医でも見逃す可能性に留意が必要。

・機器検査の必要性：

導入に際し教育課程や教職員の負担、機器の複数台導入や実施時期の調整が重要、全学年実施は課題、機器検査後の専門医療機関との連携システムが重要、客観的なデータによる学校医の心理的負担軽減に期待。

(3) 現状と委員意見を踏まえた検討事項

以下の四つのテーマについて議論を求め、委員からコメントがあった。

・せき柱側わん症検診の精度向上の手法：

前屈検査の徹底・標準化、機器検査の実施と前屈検査のあり方、学校医と専門医の連携強化、家庭におけるチェック機能の向上

- ・現時点で活用可能な検査機器等の比較：

国体験会で採用された2機種（スコリオデバイス、スコリオマップ）、スコリオメーター、3Dバックスキャナー、アプリの比較

- ・機器検査を実施するとした場合の実施時期と対象学年：

時期：2学期に実施、6月末までに別日で実施、他の検診と同時実施。

対象学年：小4～高1のうち特定の学年。

- ・今後のせき柱側わん症検診に係る検討スケジュール

4 主な意見

(1) 精度向上の手法について

- ・機器検診の導入を進めつつ、電子データ（機器検診の結果）をフィードバックすることで、前屈検査の改善や専門医との連携強化が進むのではないか。
- ・学校医は、前屈検査が必須ではないがせき柱側わん症の検診の義務はあるため、不安なまま実施している現状がある。
- ・前屈検査の精度向上（マニュアル、映像素材の充実など）や専門医との連携強化（病院・クリニック一覧の共有など）は、短期的に達成でき、即効性がある現実的な方法として支持する。
- ・機器検査は理想だが、現状は開発途上で時期尚早。費用やメンテナンスの負担、今後の発展を見極める必要がある。
- ・家庭におけるチェック機能の向上は、受診率向上に重要だが、地域特性や家庭環境による格差の懸念もある。啓発動画を活用してはどうか。
- ・疑陽性が増えることを恐れず、怪しければ陽性と判断し、専門医へ早くつなぐ連携体制を整えるべき。

(2) 検査機器の比較と実施時期・対象学年について

① 検査機器の選択

- ・スコリオメーターは費用・時間を考慮すると導入しやすい。
- ・スコリオマップはデータの電子化や判読の容易さ（業者による数値判定）が

ら、学校医の負担軽減につながることを期待される。

- ・スコリオデバイスは、客観的なデータ（数値）が残るが、再現性の乏しさが懸念される。
- ・将来的な理想は写真で判読できるスコリオマップか3Dバックスキャナーだが、着衣でできるのはスコリオマップではないか。

② 実施時期

- ・学校の負担を考慮し、比較的余裕のある2学期を中心に行うか、他の検診と同時実施して効率化を図るべきとの意見が出た。

③ 対象学年

- ・理想は毎年だが、現実的には小5と中1などの特定の学年に絞る方が良い。

④ その他

- ・機器検診を導入後は学校医の前屈検査は不要とし、モデル事業などを経ずに早期導入し、全学年毎年実施すべきとの意見も出た。

(3) 今後のスケジュールについて

- ・国からの機器のリースや貸与の可能性があれば、まずはそれを利用してモデル事業を実施し、システム作りを試みるべきとの意見が多く出た。
- ・第3回検討会も非公開で実施することが全員一致で承認された。